

SGHの取り組みから見てきたこと

生徒と共につくる 探究的な学び

Clues to Collaborative and Inquiry-based Learning

SGHの5年間に開発した
探究的な学習の指導法を紹介するため、
この冊子を作成しました。
「総合的な探究の時間」や
各教科目における探究活動の実施に向け、
指導方法を模索されている先生方に
参考にしていただけると幸いです。



平成26年度文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール



お茶の水女子大学附属高等学校

Ochanomizu University Senior High School

グローバルな社会的課題を解決し、 持続可能な未来の創り手となる 人材を育てています

本校は、2014年に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、グローバルリーダーとなりうる女性を育成するカリキュラムの開発を進めてきました。

本校では、未来の創り手となるグローバルリーダーには、環境、資源・エネルギー、災害、貧困、人口、ジェンダーなどのグローバルな社会的課題に高い関心を持ち、それらの課題を、多様な文化的背景を持つ人びとと協働して解決し、国際社会の平和と持続可能な社会を実現していくことが求められると考えています。

3年間を通じて、実社会を学びの場として、さまざまな課題を発見・解決する探究的な学習を発展させていくことを通して、未来の創り手としての資質・能力を育む、下のような探究カリキュラムを開発しました。

カリキュラムや個々の科目等の取り組みに関して、

ご意見やご質問等がございましたら、ぜひ本校までお寄せください。

グローバル地理

フィールドワーク等を通じて探究の技能を体験的に学びつつ、環境、資源・エネルギー、災害、貧困、人口、ジェンダー等のグローバルな社会的課題への理解を深めます。

年間スケジュール

- 1学期：探究の技能を学ぶ
- 2学期：グローバルな社会的課題を学ぶ
- 3学期：諸課題を通して地域を学ぶ

1

年生

● 海外研修



海外研修は探究活動の一環として実施し、台北市立第一女子高級中学の生徒と、各生徒の探究テーマに関するグループディスカッションを行っています。

お茶の水女子大学附属高等学校 3年間の探究カリキュラム

Ochanomizu University Senior High School
3 years inquiry curriculum

Global
Leader



持続可能な社会の探究 I

「持続可能な社会の探究」というテーマにそった具体的な課題を生徒自身が設定して探究活動を行い、課題を設定し解決する力、発信する力を身につけます。

年間スケジュール

1学期：探究テーマの吟味と探究

基礎調査

フィールドワーク

外部講師の特別講義

2学期：探究の深化

成果の発信(文化祭)

中間報告会

外部コンテストへの参加

3学期：探究成果の発信

論文の作成、成果発表会、異学年交流

3
年生

2
年生

持続可能な社会の探究 II

2年次の探究の成果をクラスで共有し、それを素材としてクラスで1つの英字新聞を作り上げる学習活動を通じ、協働して社会的課題を発見し解決する力を高めます。

年間スケジュール

1学期：探究Iの成果の共有

英字新聞の作成開始

2学期：英字新聞完成

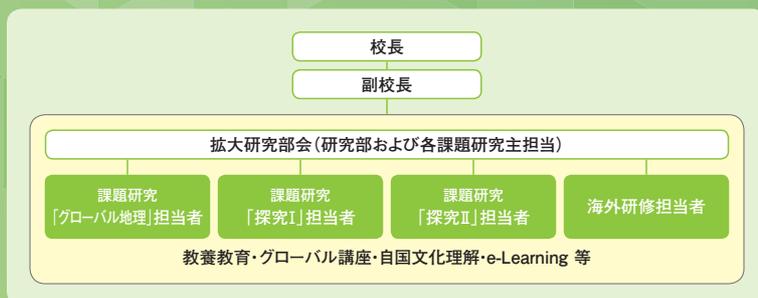
3学期：成果発表会

● グローバル講座



グローバル課題への理解を深めるため、国際NGOや研究機関、企業等の専門家をお招きして特別講義を行うほか、歌舞伎や文楽の鑑賞を通じて日本文化への関心も高めています。

● 指導体制



教養教育を基盤とし、3年間にわたって探究的な学習を進展させていく教育課程であり、全ての教員が課題研究や海外研修、自国文化理解、英語教育に関わる全校体制で取り組んでいます。

1

年生

Global Geography

グローバル地理

探究的な学習のスタートとなる必修科目です。

まず「課題探究とは何か」を理解し、「探究の技能」を学んだうえで、環境・資源・エネルギー、災害、食料、貧困、人口、ジェンダーなどのグローバルな社会課題を広く知り、「持続可能な社会の探究I」で自分が追究したいと思える課題を見つけます。

グローバル地理

1

課題研究とは何かを知り、探究の技能を身につける

フィールドで体験的に学ぶ

「グローバル地理」では、単元「課題探究とは何か」の活動の一つとして、入学間もない5月に2泊3日の諏訪フィールドワークを実施しています。グローバルな社会課題に先立って、生活圏の課題に目を向け、①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析・考察 ④まとめ・発表 ⑤新たな課題の設定という一連の探究的な学習の過程を経験することにより、課題探究とは何かを体験的に学ぶことを目的としています。

まず事前学習において、地域の情報や地理的特徴を収集した上で課題を設定し、その背景や解決に向けて実際に行われている取り組みを調査します。そのうえで自分なりの課題解決に向けた考察をレポートにまとめ、生徒間で共有します。

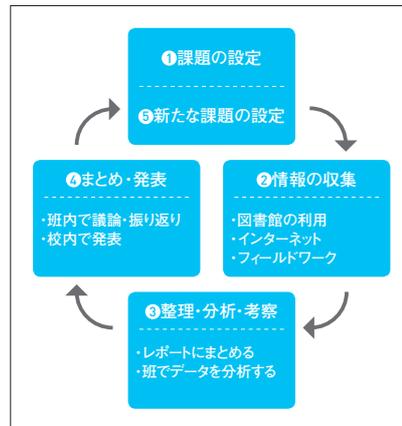
次にいよいよフィールドに出ます。現地調査を通して実際に自分の目で見ること、聞き取りを行うことにより新たな情報を収集し、地域をとらえ直すことで新たな課題を発見しつつ、より地域の現状をふまえた課題解決を考えていきます。

事後学習では、聞き取った内容や考察をグループでまとめ、報告会の場で共有します。自分とは異なった視点や意見があることに気づくことで視野を広げ、物事を多面的に見ることができるようになっていきます。また、フィールドにおける自分の行動を振り返って自己評価をすることや、地域の方々へお礼状を出すことも大切にしています。

生徒の振り返りを見ると、フィールドワーク

には探究意欲や課題解決に対する関心を高める効果があり、仲間との議論や協働作業といった学習方法が有意義であることに気づく機会となっていることがわかります。

● 探究学習のプロセス



下諏訪町御田町商店街における班別聞き取り調査の様子。前日には原雅廣氏(NPO法人匠の町しもすわあきないプロジェクト専務理事)のお話をうかがい、当日夜には宿舍で振り返りを行います。

探究の技能を繰り返し学ぶ

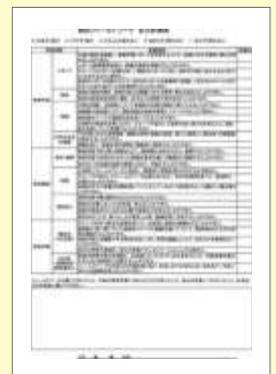
探究に必要な技能は一朝一夕に習得できるものではありません。1年生の早い段階か

担当者の関わり方

① 自主的に学ぶ姿勢を育てる

学年単位で実施するフィールドワークは、「フィールドで科目担当教員が細かい指示をできない」ことがデメリットとしてあげられますが、この状況は「生徒が主体的に行動せざるを得ない」というメリットにもなります。メリットを最大化できるように、生徒にはフィールドワークの事前学習・現地調査・事後学習のそれぞれの段階における到達目標を示した「フィールドワーク評価表」を事前に提示し、フィールドにおいてどのような行動を取るべきかをその場で確認するよう促しています。

諏訪FW評価表



拡大版をご覧になりたい方は本校HPをご覧ください。
<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/study/spread.html>

I年時の担当者の関わり方のポイント

	グローバル 地理	持続可能な 社会の探究I	外部関係者
1. 探究の技能を身につける	●		
2. グローバルな課題を知る	●		●
3. 探究テーマを設定する	●	●	
4. 所属講座を決める	●	●	
5. 所属講座の活動について知る		●	
6. 探究の手法に関する事前指導		●	●

生徒の探究活動の効果を最大化するため、「グローバル地理」と「持続可能な社会の探究I」の接続をなめらかにできるよう、1年次の活動であっても、探究のテーマ設定は2年次の「探究I」担当者が中心となり指導しています。

ら、技能を身につけることを意識することが大切だと考えています。らせん階段状に繰り返し指導することで、2年次以降の本格的な探究活動の質が向上します。地図の読図、統計、資料の分析などの地理的技能だけでなく、正しい情報の取得方法、参考・引用文献の示し方等、レポートや論文の執筆ルールの指導にも力を入れています。また、担当者からの指導に加え、専門家の方も積極的に借りるようにしており、お茶の水女子大学附属図書館担当者による「図書館活用に関する講義」や大学教員による「社会調査に関する講義」などを実施しています。

課題解決のツールの一つとして地図が有用であることを過去の事例から学ぶとともに、生徒自身が手描きで主題図を作り社会的な

課題を地図化し、発表し合うことで社会課題を共有します。コンピューターを使って地図と統計を組み合わせるGISソフトの活用にも全員がチャレンジしています。



生徒が作成した非常時お茶大 自然活用マップ。お茶大が災害時の緊急避難場所に指定されていることに着目し、キャンパス内の植物を災害時に活用する方法を地図化したものです。

担当者の関わり方

② 能動的に調査できる フィールドを用意する

探究的に学ぶ姿勢を育てるには、見学・観察にとどまらないフィールドワークになるよう工夫することが大切です。生徒の振り返りを見ると、2泊3日のフィールドワークの中でも、特に地元商店街における班単位の聞き取り調査の経験を通して、地域を本質的にとらえられるようになる様子がうかがえます。

グローバル地理

2

グローバルな課題を知る

諸課題の背景、関係を考える

1学期の終わりからは「グローバルな社会課題」について学びます。2学期にかけて、自然環境と防災・減災、環境問題、資源・エネルギー問題、食料問題、人口問題とジェンダー、居住・都市問題、生活・文化の多様性と摩擦といったテーマを幅広く学習します。3学期には、世界の諸地域に目を向け、それぞれの地域の地域的特性と「グローバルな社会課題」の関係を見ていきます。

「グローバルな社会課題」を学ぶにあたっては、課題が生じたメカニズムはどうなっているのかを考えさせ、社会事象には必ず因果関係

があることなどを意識させるようにしています。そうすることで、解決策を考える際、原因に働きかけることが処方箋の基本であることに気づくとともに、諸課題が単独で存在するのではなく、複雑に絡み合っていることも理解していきます。担当者の授業だけでなく、大学など専門分野の研究者による特別講義を年数回実施し、専門的な学問分野への興味・関心や知識を深める機会を設けています。

授業と並行して、生徒それぞれが課題を設定し、解決に向けた探究を行い、その成果を個人やグループで地図や論文、記事等にまとめ、外部に向けて発信するという学習サイクルを繰り返し、考察を深めています。

担当者の関わり方

③ 外部から 客観的評価をもらう

校内外へ学習成果を発信する効果は、その準備の過程で理解を深めたり、プレゼンテーション能力を高めたりするだけではありません。外部の専門家からの客観的な評価を得ることで、自身の探究をより多面的にとらえ、その質を向上させることにもつながっていきます。また、積極性やチャレンジ精神を養う効果もあります。

探究テーマを設定する

自らの課題意識にそったテーマを設定させる

冬休みには次年度の「持続可能な社会の探究I」で探究していくテーマを設定します。そのため、「グローバル地理」においては2学期中に一通りのグローバルな諸課題に関する学習を終えられるよう年間計画を作成しています。多くの生徒は「グローバル地理」で学んだ課題の中から特に関心を持ち、その解決策を模索したいと考えた課題を選び、テーマを設定します。中には「グローバル地理」で扱っていないテーマを設定する生徒もいますが、質の高い探究活動を1年間続けていくためには、モチベーションが非常に大切なので、生徒が設定したテーマを否定することはしません。

探究活動のテーマを設定するとともに、「持続可能な社会の探究I」のどの領域のどの講座に所属し、どのような手段で解決策を模索するかについても考えることになります。その

際、生徒が視野を狭めてしまわないよう、また、関心を持った課題を多面的にとらえられるよう、3領域それぞれにおいてどのように探究していけるかを考えさせ、テーマを設定させています。

●「探究I」の領域・講座

生命と環境領域	「経済発展と環境」 「生命・医療・衛生」
経済と人権領域	「国際協力とジェンダー」 「国際関係と課題解決」
文化と表現領域	「情報技術と創造力」 「言語に依存しない情報発信」 「音楽のグローバル化」

「持続可能な社会の探究I」では3領域7講座を設け、生徒の多様な課題意識や解決へのアプローチに対応しています。

担当者の関わり方

④ 生徒の課題を見る 視野を広げる

「グローバル地理」では、11月頃から課題を多面的に見ること、課題解決には様々なアプローチが考えられることを、生徒がよりしっかりと意識できるよう強調して伝えていきます。そうして生徒が3領域全てでテーマを設定できるよう支援しています。また、冬休み前には「持続可能な社会の探究I」の全講座担当者が、所属生徒の探究テーマや活動内容を伝える説明会を開いています。それぞれの生徒が課題への関心を探究テーマに繋げられるよう、「グローバル地理」「探究I」双方から働きかけています。

所属講座を決める

もっとも充実した探究活動ができる講座を見つける

生徒の所属講座は、「持続可能な社会の探究I」の各講座を担当する教員らが、提出された受講希望申請書を読み、生徒が3領域のそれぞれについて設定したテーマを比較し、探究活動がスムーズに進みそうなテーマはどれか、その生徒の課題意識がどこにあるのか等について検討し、最も充実した探究学習ができそうな講座に振り分けています。

当初、1つのテーマを設定させ、そのテーマを設定した動機や探究計画を詳細に書かせたうえで、受講希望講座を1位から7位まで書かせ、所属講座を振り分けていました。しかし、この方法では第一希望の講座に入れなかった生徒に、モチベーションが下がり、積極的に探究活動に取り組めずに一年間を過ごしてしまう傾向が見られました。自分の関心のあるテーマについて、多方面からのアプローチを

考えておくことにより、第二希望の講座に入った時にもモチベーションを下げず、積極的に探究に取り組める生徒が多くなりました。

● 受講講座希望申請書

拡大版をご覧になりたい方は本校HPをご覧ください。
<http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/study/spread.html>

担当者の関わり方

⑤ 生徒の探究への 意欲を高めるために

各講座の所属生徒数を均等にすることはせず、所属生徒数の多い講座の担当者を複数にすることで、きめ細かい支援ができるよう努めています。

受講講座希望申請書には、3領域でテーマ設定をさせる一方、探究動機や計画を詳細に記すことは求めません。また、第一希望以外の講座に入ることになる生徒に対しては、その講座の方が適しているとする理由を説明するなどして、生徒がモチベーションの高い状態で探究活動を始められるよう働きかけています。

探究I

5

所属講座の活動について知る

異学年交流による学び

所属講座が決まると、2月後半にLHRの時間を活用して、講座担当教諭と所属生徒の顔合わせを行い、次年度の活動内容について相談します。講座担当者は、これまでの活動内容等を紹介するとともに、生徒の課題意識を聞き、生徒の関心に合わせて年間計画を修正し、生徒は5月のフィールドワークに向けた準備を始めます。

3月の成果発表会の後には、「持続可能な社会の探究I」の講座ごとに、探究活動を経験した2年生とこれから取り組む1年生の交流の場を設定しています。1年生は、2年生から1年間の活動内容や方法、成功体験や失敗談を聞くことにより、探究活動のイメージを明確にし、不安を解消することができます。テーマが似てい

る場合には、2年生の探究の成果をふまえて自分の探究を始めることも可能になります。



3月の成果発表会後に実施している講座ごとの異学年交流の様子。1年生は2年生の話に熱心に聞き、積極的に質問をします。

担当者の関わり方

⑥ 主体的に活動を始められるよう後押しする

講座の目標や活動内容を生徒に知らせるとともに、生徒の希望を確認することが大切です。そうすることにより、生徒が設定したテーマについて視野を広げつつ探究活動を進められるよう、校外学習の行き先や特別講義の講師等をアレンジし、年間計画を作成することが可能になります。異学年交流の場では、生徒同士の交流を深められるよう、教員はファシリテーターに徹します。

探究I

6

探究の手法に関する事前学習

ブレ探究I

ーグローバル地理のまとめー

3月には、2年次からの本格的な探究学習に向けた事前指導を行います。「グローバル地理」で学んだことを、今後の1年間の探究活動で活用する場面をイメージすることが目標です。

まず、1年後の目標「こんな力をつけたい、こういう自分になりたい」を設定します。将来の自分の姿や目標をイメージできない生徒も、短期的な目標であれば見つけやすいようです。次に、今後の探究活動の進め方を確認します。生徒は2年次の講座選択をする際に探究テーマを設定しましたが、この段階では一年間追究するに相応しいテーマが設定されているとは限りません。文献収集をしていくうちにテーマを変えたいことは悪いことではないこと、文献を読んで考えを整理するプロセスを繰り返していくことの大切さを確認します。また、集めた文献や情報の記録方法、フィールドワークに向けたアポイントメントの取り方なども学びます。

図書館の活用法(特別講義)

お茶の水女子大学附属図書館の方による「図書館を活用した探究方法」と第1講義を実施し、探究活動には正確な情報を集めることが必要であることやその方法を伝えていきます。図書館で必要な書籍を効率よく検索する方法や、インターネットを活用して統計データにアクセスする方法に加えて、引用した情報の示し方についても再確認しています。

社会調査法(特別講義)

お茶の水女子大学の社会学の先生による「社会調査に関する特別講義」を実施し、課題を解決するための基本となる考え方を教えていただきます。様々な課題について、なぜそのような問題が発生するのか因果関係を明らかにすることが大切であること、エビデンス(証拠)に基づく考察とは単に数字を用いることではなく、比較することが大切であることなどを学びます。

担当者の関わり方

⑦ 特別講義の活かし方

専門家による講義は高校生には難しいこともあります。講義の内容を高校の教員がその後の探究的な学習の指導に活用していくことにより、生徒の成長に繋げることができます。そのため、当日参加できなかった教員にも資料を配布し、内容の共有に努めています。

⑧ 研究倫理の伝え方

研究倫理については様々な立場から、繰り返し、注意深く指導していく必要があります。多面的な情報を取得し、それにもとづいて推論することの大切さを伝え、不利な情報を無視することのないよう、盗用・改ざん・捏造等が生じないよう丁寧に指導しています。

2

年生

Studies in Sustainable Society I

持続可能な社会の探究 I

1年次の学習をふまえて生徒自身が設定したテーマについて、同じようなテーマを設定した仲間と協働し、1年間じっくりと探究していく「総合的な学習の時間」です。「グローバル地理」で身につけた探究の技能を向上させつつ、探究を深めていきます。講座単位の活動になるため、対話を大切に、生徒それぞれの探究を支援しています。

STEP 01 設定したテーマについて調査する

基礎調査

フィールドワーク

テーマに関する疑問を見つけ、その答えを探す

探究をスタートするにあたり、書籍やWebサイト、学術論文、各種報告書などを通して、探究テーマに関する基礎情報にふれることを大切にしています。最初は基本的な内容を扱った書籍やWebサイトなるべく多く目を通し、徐々に専門的な内容を扱う学術論文や報告書などに手を伸ばしていくことにより、探究成果を裾野の広い創造性を持ったものにすることができます。

基礎調査を生徒任せにすると、利便性の高さからWebサイトでの調査に偏りがちです。しかし、批判的思考力を適切に養うためには様々な方法で調査を行うことが大切です。そのため、たとえば「5月までは書籍のみを通して基礎調査をする」といったように、Webサイトによらない基礎調査をする時間を確保することを試みている講座もあります。

また、基礎調査を通して生じた疑問点などを記録に残せるよう、あらかじめフォーマットを用意し、探究を深めていくきっかけをつかめるよう工夫しています。そうすることで、のちに行うフィールドワークを、基礎調査で生じた疑問点を解消するだけでなく、自分なりの解答や意見に対して専門家から評価を受ける機会として活用することが可能になります。つまり、基礎調査は知識を得るだけでなく、疑問やそれに対する自分の意見を持つことが目的と言えます。

専門家の意見を聞き、現場を体験し、自分の考えを見直す

フィールドワークは、探究テーマと関係の深い官公庁や企業、NGO、NPO等の機関の専門家に、基礎調査で生じた疑問や意見を伝え、それに対する回答を得ることでより深い学びにつなげていくことを目的としているため、生徒によって訪問先は異なります。グループごとに訪問先を選び、訪問先と交渉してアポイントメントを取り、フィールドワークを行うよう指導しています。

「持続可能な社会の探究I」では、5月に全員がフィールドワークを行うよう年間計画を組んでいます。フィールドワークの事前準備は生徒が行いますが、その前に電話の仕方やメールの書き方、アポイントメントの取り方、お礼の仕方といったマナーを指導します。フィールドワークの希望日の2〜3ヶ月前に連絡すること、複数のアポイントメントが同日同時間で重なることがないようにすること、返答の期限を伝えることなど、大人にとって当然のことも丁寧に指導していくことが重要です。また、複数のグループが、同一の場所にそれぞれアポイントメントを取り、先方にご迷惑をおかけしないよう、生徒が先方と交渉に入る前に、希望する訪問先等を把握し、同じ機関を訪問しようとしているグループがあれば、1つのグループとなって交渉するよう指導しています。

アポイントメントがとれたら、行程表に訪

問先までの経路や緊急連絡先などを記入させ、当日の安全管理体制を作ります。書籍等で調べれば分かるようなことを聞くことがないよう、行程表には訪問の目的や質問事項を記入する欄を設け、記入内容を事前に講座担当の教諭が確認しています。この作業を通して、基礎調査により得た自分の意見や仮説を明確にすることもできます。

フィールドワーク終了後にお礼の手紙またはメールを出す際、探究活動が進んだ段階で再度訪問したい旨を伝えておくと、探究活動の成果を客観的に評価してもらう機会を作るにつながります。

行程表の例

STEP 01 設定したテーマについて調査する

STEP 02 探究活動を繰り返し、深める

STEP 03 探究の成果を伝える・振り返る・
新たな課題を発見する

1年をかけてSTEP01からSTEP03へ進むとともに、それぞれのSTEPの中でもSTEP01・STEP02・STEP03の活動を行えるように年間計画を立てています。

テーマ設定に関する 報告会

テーマの再設定

フィールドワークの成果を共有し、 テーマを多面的にとらえ直す

基礎調査とフィールドワークが終わった段階で一度、領域単位で報告会を実施します。自分の得た知見を他者に伝えることができるよう準備をすることを通して、自分の考えを体系的に整理することができます。また、様々な探究テーマに関する報告を聞くことは、自分のテーマ設定について客観的にとらえ直すことにつながります。報告会では質疑応答の時間を設け、質問に的確に答える力だけでなく、質の高い質問をする力を身につける機会にできるよう工夫しています。また、効果的な発信ができるようになるために、プレゼンテーションに関するルーブリックを作っておき相互評価を行っています。ルーブリックは評価のしやすさを重視したシンプルなものであるほど、報告会をスムーズに進めることができます。報告会終了後には自己評価を行います。相互評価と自己評価とを比較させることにより、発信力・評価力の向上につながっています。

探究活動の内容を決める

テーマ設定に関する報告会をふまえ、これまでの探究活動を振り返ります。とりわけ設定したテーマが適切かどうかについては必ず考えさせるようにし、必要があれば再設定をうながします。場合によっては全く異なるテーマに変更することもあります。なるべくこれまでの基礎調査やフィールドワークを活かせるよう、テーマをより具体的にする、要素を絞り込むなど、できるだけ探究活動に連続性を持たせるように働きかけています。テーマを再設定したら、今後の探究活動の計画を立てます。その際、フォーマットを用意しておく、それぞれの生徒の探究活動の進捗状況を把握しやすくなりますし、ポートフォリオ評価にもつながります。

「調査・フィールドワーク・成果報告・振り返り」を探究活動の基本サイクルとし、年間で3回程度このサイクルを経験できるように働きかけることで、探究活動の質が向上し、より深い学びにつながります。



公益財団法人WWFジャパンへの訪問。生態系保全の現状を調査。



株式会社セフティライフにて管理栄養士に健康と食についてインタビュー。



東京大学医科学研究所を訪問。研究室を見学し、研究者からお話をうかがう。



特定非営利活動法人JENへの訪問。現場の目から見た難民支援を調査。



報告会は領域ごとに行います。スライド使用の有無など、形式は目的により異なります。



テーマの再設定をすると、探究活動の一連の流れを一回実施することになります。



経済発展と環境

Economic Development and the Environment

大

気汚染、森林破壊、地球温暖化などの環境問題、資源・エネルギー問題、地震・風水害などの自然災害と防災・減災について、その発生メカニズムや因果関係を明らかにしながら、解決方法を考え提案することを目標とする講座です。4月は受講者それぞれが自ら設定した様々な探究テーマを共有することからスタートします。7月以降は、探究テーマが類似する生徒同士が4～5人のグループに分かれ、グループ単位で探究を深めていきます。文献による調査だけでなく、大学の研究室を訪問するなど専門家の意見を直接伺うこ

とやアンケート調査の実施などにより多くの一次情報を取得します。探究活動の成果は、論文やWebページを作成し、外部コンテストを活用して広く社会に発信していきます。

グループ単位の活動では、生徒同士の意見がぶつかり、進むべき方向を見失うこともあります。課題解決に向けた議論・探究を重ねることにより、協働する力やコミュニケーション能力を伸ばすことができると考えています。また、他者の異なる意見をまとめる経験は、リーダーシップを備えた人材の育成には欠かせないと感じています。

本講座の生徒が取り組んだ具体的な探究テーマの一例をご紹介します。

「うなぎ×サステナブルシーフード＝うなブル」(第20回中学高校Webコンテスト総務大臣賞)では、ウナギを未来に残し、持続可能な水産資源としていくための課題とその解決方法について情報発信を行いました。

「効率のよい配達で環境への負荷を減らせるか!？」(中央大学主催第17回地球環境論文賞・最優秀賞)では、再配達の問題を労働環境だけでなく運送にかかるコストや環境負荷という観点から捉え、今後の配送のあり方について提案しました。

「ふくのはなし」(第18回中学高校Webコンテスト経済産業大臣賞)では、「服」と環境問題の関係を掘り下げ、倫理的消費を促すための情報発信を行いました。このテーマに取り組んだ生徒は、卒業後にカンボジアやラオスの繊維工場を実際に訪問し、労働環境の実態を調査するなど、探究活動を続けています。



生徒同士や特別講師と議論する機会を大切にしています。

外部コンテストの活用 (全国中学 Web コンテストの活用事例)

「経済発展と環境」講座では、探究成果を発信する場の一つとして、特定非営利活動法人学校インターネット教育推進協会主催の「全国中学高校Web コンテスト」に参加しています。同コンテストは1998年から20年以上続いているICTを活用した探究学習のコンテストです。生徒は、協働して1つ

の作品を仕上げていくことを通して、自分ひとりでは気づけなかった新たな視点を獲得し、探究を深めていきます。中間審査や最終審査を通じてフィードバックされる大学の先生方からのアドバイスや客観的評価は、生徒のモチベーションを向上させ、探究の質を高めることに役立っています。



「うなぎ×サステナブルシーフード＝うなブル」(総務大臣賞受賞作品)

生命・医療・衛生

Life, Health and Medical Care

生 命倫理・保健医療・公衆衛生に関するグローバルな諸課題について探究活動を行っています。選択者には医歯薬学系・保健衛生系への進路を希望している生徒が多く、探究テーマも多岐にわたっているのがこの講座の特徴です。

1学期中は、生徒が自身の探究テーマに固執せず、幅広く基礎知識や見聞を広め、多角的な視点をもてるよう働きかけています。外部講師や外部施設(研究機関、病院、資料館、企業等)に協力を仰ぎ、専門家による講義やフィールドワーク(以下FW)を積極的に導入しています。全員で共通した内容を見聞きし、学んだことをグループ単位でディスカッションするなどして振り返ることで学習を深め、講座全体で共有できるよう心がけています。このような活動を通して、生命・医療・衛生に関するグローバルな諸課題は、相互に密接に関連しており、その解決方法を一つの側面からのみ探るだけでは根本的な解決には結びつかな

いことに気づかせています。

夏休みには1学期の学習をふまえ、自身の探究テーマに関連する書籍を2冊以上読んだうえでプレ論文を執筆します。これは生徒が2学期以降の探究活動の方向性を定めることをねらいとしています。2学期以降は探究テーマの具体化や修正を行い、グループ単位で書籍、インターネット、FW、アンケート調査等を利用して情報収集をさらに進めます。得られた情報をまとめ、それらをもとに冬休みには本論文を執筆することで、自身の探究テーマについて掘り下げ、課題解決のために有効なアプローチについての考察を深めます。

3学期には年間の探究活動の総まとめとして、論文を作成し、探究成果の発信や啓発活動に取り組み、それらを講座内発表会で共有します。発表会では全員が話し手・聞き手の両方を務める機会を十分に確保し、どうすれば探究成果を効果的に相手に伝えられるか、そのため的手段や工夫を試行錯誤しながら、表



グループワークやフィールドワークなど物事の本質や根幹に触れる機会を多く与えています。

現力やコミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上・定着をめざします。探究活動の成果や取り組みに対する相互評価を生徒同士で実施するほか、グループ単位で執筆した本論文は「講座内論文集」として冊子にまとめ、全員の共通の成果物として配付しています。

相互評価の活用により、生徒の探究を深め、発信力を鍛える

「持続可能な社会の探究I」では報告会等でルーブリックを用いた相互評価を行っています。相互評価の特徴は、自らの探究活動を他の生徒が評価することと、自分自身も評価者として他者を評価することです。この仕組みによって、ルーブリック評価項目をきちんと理解させること、探究内容の

深化や発信力の強化を促す場面を増やすことができます。生徒たちは「発表時間内に収まるようになってるか」「私たちの探究活動内容を伝えるうえで必要な情報が適切に盛り込まれているか」などを考慮しながらプレゼンテーションの準備をしますが、他の生徒の発表を評価する場合も準

備段階と同様な意識で聞き、できる限り客観的に評価しようと努力します。相互評価を行うことで少ない発表等の機会をより濃密な学びの時間にすることができ、他者からの評価と自ら発表を行い感じた課題をそれぞれ分析して今後の発表や探究活動に生かすことができます。



経済と人権領域の探究活動

Economy and Human Rights

国際協力とジェンダー

International Cooperation and Gender issues

世 界各地で生じている貧困や紛争、女性の地位の低さなどの社会課題についてジェンダーの視点で現状を理解し、その課題解決方法について探究していく講座です。世界の社会課題の解決・解消に向けて私たちにどのような貢献ができるか、幅広い角度から探究していきます。また、その過程や成果について対外的に発信していく力を養うことも目的としています。

実社会を学びの場として学習に取り組むことを促すため、外部機関との連携に重きをおいています。社会課題をジェンダーの視点で分析する力を培うため、お茶の水女子大学をはじめとする大学の先生方などの専門家による特別講義を実施し、表象リテラシー、宗教、風習・習慣と国際協力のあり方、政治・経済やその時々社会情勢とジェンダーの関係性など多角的にとらえる視点などを学んでいます。それぞれの講義の後には、ディスカッションを行い、理解と考察を深められるよう工夫しています。また、NGOなどを訪問するフィールドワークを

通して、国際協力のキーワードである国連SDGsについて体験的に学ぶ機会を設けています。

ジェンダー問題は多岐にわたっているため、授業時間だけでは基礎的な知識を担保することができません。そこで、ジェンダーに関する著書を読むことを課し、考えたことを発表しあう活動も実施しています。こうした活動は、基礎知識を身につけるとともに、主体的に探究に向き合う姿勢を培い、プレゼンテーションファイルの作成や発表の技能を鍛えることにもつながっています。

探究の成果を発信する活動として、ジェンダー問題啓発イベントの開催や、啓発商品の開発・販売などを行ったこともありました。こうした活動を通じて、必要に応じて他者と協働して活動を進めることの大切さを体験し、主体的かつ協働的な探究活動を進める方法をより意識化していくことが可能になります。また、イベントの後援等としても、官公庁、企業、NGOと連携し、ご協力をいただいています。教員が事前に交渉先を把握し



啓発イベントの実施やカンボジアの子どもたち用の教材作成などの活動に取り組みました。

必要に応じてサポートはしますが、交渉は生徒たちが行っています。外部機関と連携し、社会に開かれた学びの場を提供することにより、生徒の行動力を引き出しながら、探究を深めていけるよう支援しています。

生徒の負担を考慮したカリキュラムマネジメントを

探究的な学習には終わりがありません。探究をしていくと、新たな疑問や課題を発見するからです。熱心に取り組む、探究を深めていこうとすると、無限に時間をかけることができます。本校では、夏休みや冬休みの課題、中間報告会や外部コンテスト、

イベントの準備等に時間をかける傾向が見られます。生徒の健康や他の教科目の学習、特別活動等に配慮しつつ、生徒が積極的に探究活動に取り組める体制を整えるためには、学校全体の動きを見通した年間計画の作成が必要であると感じています。



国際関係と課題解決

International Relations and Resolution

貧

困、難民、テロ、人権、軍縮、食糧、移民といった多国間にまたがる国際的課題について、具体的かつ現実的な解決策を考えることを探究テーマとしています。

生徒は、最初にそれぞれの探究テーマに関する基礎調査を行い、調査から得たその時点での自身の意見や仮説に対して、官公庁や企業、関係機関などを訪問して評価を受けます。また、企業や関係機関の方を招いての特別授業も実施します。その際、テーマ設定や活動内容、使用するワークシートの工夫など、事前に詳細な打ち合わせをして担当教員と講師がイメージを共有し、特別授業が生徒にとってただ話を聞くだけのものにならないようにすることが大切です。

次に、探究テーマとしている国際的課題の構造をモデル化したマップを作成します。この時、各国政府の総合的判断の結果の賛成・反対という立場をマップに

するのではなく、課題の構成要素を考え、具体的かつ現実的な解決につながるような要素に関する立場をマップにするよう指導しています。さらに、グループで探究活動を行っている場合は、1人に1つの担当国を割り当て、それぞれの生徒が担当国の立場から探究テーマを掘り下げるよう調査を行い、担当国の立場を主張し合いながら解決への方向性を見出す、多国間交渉を模した学習活動も取り入れています。

こうした活動を通してより具体的かつ現実的な解決策を考え、最後にその解決策に対する意見や評価をもらうことを目的としたフィールドワークを行い、自身の探究活動を客観的に振り返るよう指導しています。

国際的課題は、歴史や民族、政治状況などによって国の立場がそれぞれ異なるため、単純な正論で解決するわけではありません。そのため、多くの国の状況を把

握し、より多くの国が賛同できるような解決策を考えていくことが求められます。このように様々な要因・立場・方法について探究活動を行なうことにより、論理的かつ複眼的に課題解決に向けてアプローチできる、将来のグローバル・リーダーを育成することが、この講座の目標です。



探究活動の成果を他者に伝える機会を多く設けることは、より深い探究活動につながります。

企業と高校が連携する 日本アイ・ビー・エム 塚本亜紀様

お茶の水女子大学附属高等学校様とは、弊社が実施している高校生向けのグローバル人材育成セミナーに生徒さんをご参加いただいたご縁で、SGH開始当初より一緒させていただいております。「国際関係と課題解決」という広いテーマの中で、社員のグローバルな協働の事例を紹介しながら、演習を通じて、異文化コミュニケーションにおいて実際に課題となってくるのはどういう点かを実感していただく

という試みを行いました。限られた時間ではありますが、このような活動を通じて生徒さんには、総論としての「グローバル」ではなく、弊社の社員が実際に苦労したり工夫したりしている生の声をお伝えすることにより、協働の状況や相手を想定した課題やそれを乗り越えるための具体的なヒントに触れていただく機会をご提供したいと考えました。また、弊社の社員にとっても、自らの体験を改めて振り返り、生徒さんにお伝え



することにより、自分の仕事の意義や学びについて改めて考える貴重な時間となり、感謝しております。



文化と表現領域の探究活動

Culture and Expression

情報技術と創造力

Information Technology and Creativity

こ れまでに先人たちが築き上げてきた「科学」「技術」を「創造」的に用いて、「社会」にある諸問題を改善・解決すべく課題に取り組むことをめざす講座です。また、この講座における探究活動を通して、論理的思考力とICT活用能力も培っていきます。

プログラミングをはじめとした技術は、これまで日常的にICTと関わってきた密度によって個人差が大きく、1人で取り組んだ方が目に見える成果を出しやすいこともあります。しかし、この講座では、グループで取り組む時に遭遇する様々な問題に対処しながら、複眼的視野を活かし、協力して課題を解決していくことを重視しています。

同じ興味を持つ生徒でグループを構



機械学習に関する講義とExcelによる機械学習の演習。



成し、探究活動を進めます。教員が必要な技術や知識を指導したり、企業から外部講師を招いたりすることもあります。必ずしもそれら全てを活用する必要はありません。生徒は自身の興味・関心を原点として、必要に応じてそれらの技術や知識を使用していけばよいと考えています。

また、さらにある事柄や技術について追究したい場合は、生徒が主体的にフィールドワークを行い、必要なハードウェアやソフトウェアの導入を教員に進言することもあります。こうした生徒の自発的な学びに向かう行動を教員がうまくサポートしていくことが大切です。

探究的な活動を通して学んだこと 情報技術と創造力講座 遠藤光

私はプログラミングの技術が十分でなかったため、今まで使ったことのなかったC言語を学びながら、アプリの作成に挑戦しました。自宅にSwiftに対応できるPCがなかったため、家でコードを考えて書き出し、学校に来てPCで試して全く思い通りに動かず頭を抱えることもありましたが、入力したコードが正しく動いた時には、モノづくりの楽しさ、喜びを感じることができました。

探究の過程で、憧れのサイバーディフェンス研究所を訪問し、お忙しい方々から様々なお話をうかがい、ご助言を得ることができました。辛い時も投げ出さず

最後までやり遂げることができたのは、自分の探究を支えてくださっている方々のためにも、何としても実りあるものになりたいと強く思っていたからではないかと思えます。

探究活動を通して、物を作る時には明確なイメージを持つことがとても大切であることを学びました。また、計画を立てて行動すると同時に、うまくいかない時に柔軟に対応することの大切さを学ぶこともできました。できることとできないことは探究の過程で明らかになってくるので、そこからできあがりのイメージや計画を調整しなくてはなりません。そうした調



SGH 成果発表において情報セキュリティに関する探究の成果を発表しました。

整のためにメンバーとコミュニケーションをとることも、貴重な経験だったと感じています。

音楽のグローバル化

The Globalization of Music

この講座では、「研究とは何か」「議論の進め方」「論文の作法」という3つのテーマを中心に、実際に研究を進める際に必要とされるスキルの獲得を目指した活動を行っています。

「音楽」は非常に多義な概念を持っており、そこに社会的な課題を見出すことには多少の困難が伴います。生徒たちは、興味ある分野の中に内包された諸問題をピンポイントで焙り出すために、文献等

を「否定的・批判的な目」で読み込み、「研究題目」を実際に作ってみるなどの作業を通して課題を明確化し、どのような事柄が「研究」となり得るのかということを探ります。

さらに、表現力と理解力の伸長を図るため、参加者全員で同一の問題について質疑と議論を重ねる「ゼミナール方式」によって探究を掘り下げています。事柄を順序立てて説明していくこと、それらに

自論で呼応していく思考過程、また論を戦わせる際の作法などは、自己表現のための最も必要なスキルであり、協働的学習で得られる効果として本質的なものと言えるのではないのでしょうか。

これらに、最終目標である「論文」の執筆も加え、授業で身につけた「表現のための基礎的なスキル」が、生涯にわたって活用されることを期待しています。

言語に依存しない情報発信

Art and Expression (non-verbal communication)

言語に依存しない方法を用いた解決策を模索することを共通のテーマとして掲げ、生徒の多様な興味・関心にそって選ばれた探究テーマに対応しています。これまでに生徒が取り組んだ探究テーマとしては、「車いす利用者も安心して観戦できるスタジアム」、「視覚障害者が安全に利用できる駅ホーム」、「子どもが安心して利用できる病院づくり」などがあり、設計やデザインの工夫による解決策を提案する生徒が多く見られました。

生徒は、それぞれの探究テーマに

そって、解決すべき点を発見し、それを分析して問題の本質を見極め、解決するためのアイデアを創意工夫し、提案できるよう探究活動を行っています。問題を分析する過程には、コンピュータによる図解化の手法を取り入れ、作図により問題点を明らかにしたうえで解決方法を考える活動を組み込み、具体的な改善案を提案することを重視した指導を行っています。

また、講座に所属する全員で探究テーマやその背景にある社会の状況などについて検討する機会を設け、それぞれの

探究テーマをより広い視野からとらえ直すことができるよう支援しています。一連の活動を通して、グローバルな諸課題を解決する多様な手法に気づくことが、この講座の目標です。



STEP 03

探究の成果を伝える・振り返る・
新たな課題を発見する

1 論文を作成する

正確な論文の作成には、探究記録の積み重ねが必要

論文の作成にあたっては、探究動機と目的、探究の方法、探究の成果と課題・展望、引用・参考文献といった項目をふくむフォーマットを用意します。論文は探究活動が終了してから書き始めるのではなく、探究活動をしながらかつ成果を少しずつ文章にしていくよう指導しています。そうすることで、負担が分散されるとともに、論文作成が記録や振り返りの機会ともなり、探究を深めることが

できます。そのため、アカデミックライティングについては探究活動の初期の段階で指導しています。とりわけ引用・参考文献の書き方については、「図書館の活用法」での学びを振り返りつつ、書き方次第では剽窃・盗用とされることを確認します。正確な出典を記すためにも、調査のたびに記録を残すことの必要性をあらかじめ伝えておくことが大切です。



2 発表会で成果を発表する

成果発表会等の機会を設け、大勢の人に伝える力を鍛える

本校では3月に成果発表会を実施し、保護者や大学の先生方、近隣の中学生等を招待して、探究の成果を発表する機会を設けています。講座全体の活動や、代表者の探究の成果を発表し、来場者から高い評価を得ています。これは、年間計画に講座内あるいは領域内の発表会を2回以上組み込み、全ての生徒にプレゼンテーションをする機会、プレゼンテーションを評価する機会を

複数回与えている効果だと考えています。5月の報告会では、原稿を読みながら下を向いて報告する生徒や、スライドに情報を詰め込み過ぎてしまう生徒が多く見られますが、相互評価や教員からの指導を通して発信力を高め、3月の発表会では聞き手に最も伝えたいことを伝えられる発表ができるように成長しています。



3月に行う成果発表は大学講堂にて行います。発表は日本語か英語、どちらで行ってもよいことにしています。



3 異学年と交流する

異学年交流を通して自分の成長を意識し、次の目標を明確にする

成果発表会后、講座ごとに、1年間探究的な学習に取り組んできた2年生が、次年度その講座で活動する1年生に対して、自分の探究の成果を発表する機会を設けています。その際、2年生がプレゼンテーションを行うだけではなく、探究の内容や手法について、1年生と2年生が活発な質疑応答、自由な意見交換を行う交流の時間を十分に取るよう、ゆとりをもったスケジュールを組ん

でいます。それはこの異学年交流は、1年生が1年間の探究的な学習のイメージを理解する機会になるだけでなく、2年生が発信や対話を通じて、1年間の探究的な学習を振り返り、自分がどのように成長したかを意識化する大切な機会にもなるからです。成長を意識化することにより、次の目標を明確にし、「持続可能な社会の探究II」に取り組むことが可能になります。



大勢に伝える方法とは異なる伝え方で目の前の1年生に伝えることにより、プレゼンテーションの技能も鍛えられます。

3

年生

Studies in Sustainable Society II

持続可能な社会の探究 II

3年間の探究的な学習のまとめとなる「総合的な学習の時間」です。

「持続可能な社会の探究I」の成果をもう一度客観的にとらえ、

英字新聞の記事としてまとめる活動を行います。

各グループの探究の内容や成果を比較・検討して8～10本の記事に精選し、

世界中の同世代の若者を読み手として想定し、クラスごとの英字新聞という形で表現します。

英語による探究活動の成果共有と発信

受験を控えた3年生でも全員が取り組める探究的な活動として、「2年次に行った探究の成果を、異なる集団で共有し、まとめ直す」という方法が考えられます。過度な負担を避けつつ、様々な教科の学習で培った思考力や表現力を生かしながら、2年次の探究成果の再検証を行います。本校では、英語による探究的な学習成果の発信のため、一般社団法人グローバル教育情報センターのEnglish Newspaper Production Projectに参加し、「クラスごとの英字新聞作成による共有」を行っています。成果を単に英訳するのではなく、世界の同世代を読者とするを想定して英

字新聞を作成するという制約により、情報量(紙面)が限られている新聞記事の特徴を生かし、生徒たちは必要な情報を端的に客観的な英語で伝えることを意識します。これにより、まとめ直しの効果が高まります。また、英語科で学習したエッセーや意見文などのライティングと違う英文スタイルを学習する機会にもなっています。

クラスで1つの英字新聞を作成するために、記事作成班として8～10チームを構成します。これらのチームを束ねるのが、編集長を頂点とした3～5人程度のメンバーで構成する編集部です。編集部を中心に、「3年次にクラス全員で1つの英字新聞を作

成する」というミッションを生徒たちの手によって達成していきます。生徒同士で話し合い、記事にできる探究成果を絞り込み、記事を作成し、推敲するなかで、協働性や批判的思考力が養われます。特に編集部には、紙面割から記事内容や方向性の相談や指示、チームの進捗管理などが任されており、より高度なコミュニケーション能力やリーダーシップが要求されます。各クラス1名の担当教員は、編集部の相談役となり、生徒中心の活動を支援するとともに、担当教員間でも各クラスの進捗状況や取り組みの特徴を共有し、教員も1つのチームとして学年全体の活動を支えています。



クラスでの活動、グループでの活動、個人活動を組み合わせて新聞を作成していきます。日頃の授業も編集部が進行し、担当教員は必要に応じて助言します。

探究を成功させる 4つのポイント

本校では様々な失敗に直面し、その度に担当者間で課題を共有し、改善策を模索しながら、カリキュラムを開発してきました。これまでの経験をふまえ、探究的な学習を成功させるために大切だと考えるポイントを4つ提案します。

目標を明確にする

ポイント
1

探究的な学習は非常に広がりのある学習活動です。たとえば、課題の複雑な背景を正確に読み解くことをめざすのか、実社会に出て活動することをめざすのか、調査の技法を身につけることをめざすのか。高校生の限られた時間の中で全てを達成することはできません。学校として探究的な学習で生徒にどのような力をつけさせたいのか、目標を明確にし、生徒の成長を評価する姿勢で指導にあたるのが大切だと感じています。

生徒の主体性を引き出す「対話」を大切にする

ポイント
2

質の高い探究的な学習を実現するには、時間をかけてじっくり考えること、広く調査をすることが必要です。そのため、生徒自身が取り組みたいテーマ・方法で探究することがポイントです。また、多くの生徒は一人で思考を深め、考えたことを言語化することができません。それを助けるのが生徒同士、生徒と教員の「対話」です。教員の役割は、教えることではなく、生徒の思考を促す「対話」の相手になることだと考えています。

スパイラルなカリキュラムを作成する

ポイント
3

探究的な学習の技能は一度の経験では身につけません。そのため、年間計画は、①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析・考察 ④発表 ⑤新たな課題の設定 という探究的な学習の一連の過程を、発展させつつ、複数回繰り返すように作成することが必要です。また、3年間にわたって探究的な学習の時間を設けることにより、生徒の課題発見・解決力をより高めることができると考えます。

社会全体を学びの場とする

ポイント
4

社会のさまざまな課題を解決していく人材を育成するには、特別講義やフィールドワーク、イベントの実施等、学校内にとどまらない活動が効果的であると考えます。学校では得られない刺激が生徒の視野を広げ、モチベーションを向上させます。近年、大学や官公庁、企業、NGO等は非常に積極的に高校生を受け入れてくれますので、ぜひ社会に開かれた教育を広げていきましょう。

教師の学び合い 学校の変容 ～教員の声～

保 健体育科の教諭として、理科(生物)の教諭と一つの講座を担当することにより、健康や医療、生命をとらえる視点が広がり、専門性を高められました。また、生徒の興味・関心を知ることができました。そうした成果は教科の授業にも反映させています。

領 域ごとに中間発表会などを行うため、同じ社会的課題に、自分が担当する講座の生徒とは別の視点から解決を模索している生徒の発表を聞く機会があります。生徒の探究活動を通じて自分の知らない分野で注目されていることなどを学び、自分の指導や教材研究につなげています。

探 究活動の内容や方法を生徒に主体的に選択させることと、学問的に正確であることを両立することの難しさを感じています。どのようにバランスを取っていくかは今後の課題でもありますが、生徒と話しあって目標を共有して年間計画をたてるのが大切だと感じています。

S GHとしての活動を通して、学校全体で育てたい生徒像を考え、どのような学習活動が必要か、カリキュラムの効果をどのように検証するのか、課題の改善に向けて何をすべきかを考えていく、探究的に教育活動に取り組む学校になったのではないかと感じています。

卒業生の言葉

Word

現在の挑戦を支える探究的な学び

中基千智さん(2017年3月卒業 早稲田大学政治経済学部経済学科2年)

高校時代の「探究I」の活動を振り返ると、その後の挑戦を支える自信やモチベーション、スキル、そして仲間を私にもたらしてくれたと感じています。まず、探究活動の成果を作品として完成させ、かつコンテストで大きな賞をいただいた自信が、学びを深めていきたいという気持ちに大きくつながりました。正しい情報の収集や分析に関す

るスキル、自分が発信する情報に対して責任を持つという姿勢も身につきました。また、活動を通じて、数々の辛くも楽しい経験を共にしたメンバーは、私にとってかけがえのない存在です。今も彼女たちの挑戦・活躍する姿が私の大きな原動力となっています。2018年9月から、1年間アメリカ留学に挑戦しています！



「持続可能な社会の探究I」では、経済発展と環境講座で、「服」と環境問題について探究。

SGH教育で培ったグローバルに学び続ける力

森下瑠里花さん(2018年3月卒業 お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科1年)

SGH教育は、私の大学生活を形成しているといっても過言ではありません。なぜなら、「グローバル地理」や「探究I・II」で地球規模の環境問題や持続可能な社会、異文化理解についての見識を深めて、世界に興味を持つようになったからです。高校時代に学校主催海外研修の台湾を含めて、カナダやドイツを訪れたのも、育った背景の異なる

他者との関わりを持ち、現地を視察できたという意味で良い経験でした。大学1年生の今夏は、学生会議で中国に3週間、外務省派遣で韓国に10日間行きました。高校時代にグローバルに考える力を身につけ、物事を懐疑的に深く考える思考力を養うことができたからこそ、今の自分があります。これからは更なる成長を目指します。



「持続可能な社会の探究I」では、国際関係と課題解決講座で、日本経済の活性化について探究。



お茶の水女子大学附属高等学校
Ochanomizu University Senior High School

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL : 03-5978-5856 FAX : 03-5978-5858
HP : <http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/>
E-mail : ochako-kenkyu@cc.ocha.ac.jp

